

# 生 *Seikatsu Bunkashi* 史 活文化

<史料館だより>

## 目 次

深江の菅原酒造場について	
福田賢二氏撮影のアルバムから (1) .....	大園正美 2
「切手から見る五〇年前の日本」の展示 .....	有吉康徳 3
昭和時代 深江の子供の遊び .....	深江 塾 4
深江物語 (4) 昭和20~30年代の深江浜を歩く (2) .....	森口健一 10
史料館における IT 施策 .....	高田祐一 16
~web サイトアクセス状況~	
史料館拡張30周年と杉浦昭典名誉館長の瑞宝中校章受章祝賀会 .....	道谷 卓 17
トライやるウィークと史料館 .....	水口千里 18
一本庄中学校の生徒を受け入れてー	
史料館日誌抄 .....	道谷 卓 20
	藤川祐作



2014.3.31  
NO.42

戦前、深江にあった菅原酒造場の昭和13年12月の風景。大正期に大阪から移ってきた酒造業者だったことが、今回の調査で判明した。しかし戦時中には蔵を売って深江から撤退したらしく、存在を知っている人もごくわずかになった。

神戸深江生活文化史料館

## 深江の菅原酒造場について

福田賢二氏撮影のアルバムから（1）

史料部長 大國 正 美

大正期から昭和中期まで深江永江町（現深江本町一丁目）に住んだ医師黒田賢二氏と次男耕平氏が撮影したアルバムを、耕平氏の娘の福田恵子さんから寄贈いただいた。

賢二氏は栃木県の出身で、大正三年（一九一四）大阪大学医学部の前身になる府立高等医学校を卒業、大阪市西区九条で福田医院を開業した。恵子さんは深江に生まれ中学までこの地で生活した。現在は相生市に居住している。

賢二氏の写真は、玄人はだして、人物の肖像写真よりも風景写真を好んで題材にしている。撮影年月日を記載しているのが重要で、失われた戦前の深江の風景を復元する重要な写真である。今後検討を加え順次紹介していきたい。一回目は戦前の菅原酒造場である。

幕末からの深江の酒造業を少し振り返っておきたい。深江でも酒造は江戸後期に盛んになり、幕末の慶応元年（一八六五）には十人の酒造家があった（『本庄村史』）。明治初年に最盛期を迎えたが、足踏みによる精米が中心で純白とならないため芳醇さに欠け、東京での評価を落とし、地回りへの出荷が中心になった。酒造税の増加もあって廃業が相次ぎ、『武庫郡誌』によれば、大正八年（一九一九）当時の深江の酒造業は魚崎の松尾「兵衛」の出造りのほか、江戸時代から続く水田龜吉と、大正二年創業の菅原酒造場の三軒だけになっていた。



昭和13年12月深江酒倉



地図の右端に菅原酒造場

さて福田賢二氏の撮影した写真の中に「昭和十三年十二月」と記入された二枚の酒蔵の写真がある。湯気の立つ桶には「菅原」という焼印が押されていて、菅原酒造場の風景写真だと判明する（表紙写真）。菅原酒造場は、事業主管原幸助、大正八年当時蔵数一、銘柄「菅梅」、査定石高四二五石の小規模な酒造家だった（『武庫郡誌』。昭和十二年（一九二七）には銘柄は「菅土」となっている（東京交通社発行「大日本職業別明細図」五一三号）。酒蔵の位置は字磯島、札幌通に面した角地であり、現在の深江南町四丁目一〇番二五号にあたる（図1）。磯野吉蔵氏の記憶によれば冬だけの醸造だった。

『本庄村史』によれば昭和三年版・同六年版・同十一年版、同十三年版・同十四年版の「兵庫県工場一覽」で営業が確認される。

しかし「兵庫県工場一覽」では大正二年十一月事業開始とあるもの、大正期のことは未詳だった。今回「日本全

「国商工人名録」（国会図書館所蔵）を調査したところ大正三年版・同五年版・同八年版では大阪市北区錦屋町の酒造業者として見えるが深江の酒造業者には見えない名が深江の酒造業者として登場している。さらに昭和十八年一月の「兵庫縣酒造組合聯合会々員名簿」に「菅王」の銘柄の酒造家として「菅原幸助」、住所は「大阪市北区錦屋町」、電話は「大阪堀川七五八」として掲載されていることも分かった。すぐ近くで

## 「切手から見る五〇年前の日本」の展示

史料編纂委員 有吉康徳

二〇一四年一月から、「切手から見る五〇年前の日本」という企画展示を行っている。展示されている切手は、当館主事である阿部英子氏より二〇一三年九月に寄贈された切手のコレクションの一部である。阿部氏の切手コレクションは、切手ブームが起きた昭和三十一年代から昭和四十年代を中心に、約三十年間にわたり収集されたものである。

今回はその中でも、高度経済成長期の日本を象徴する記念切手が多数発行された一九六四年に焦点を当てた。同年に発行された記念切

酒販売店を営む島信也さん（昭和二年生）によると終戦間際は、すでに酒造は譲渡され、戦間機業電改などを製造していた川西航空機甲南製作所（現・新明和工業）の部品の疎開先として利用されたという。以上、菅原酒造場は大正二年十一月、大阪市北区錦屋町で事業を始め、大正九年ごろに大阪から深江に進出、昭和十八年ごろまで酒造を続けた。ただ自宅は錦屋町のままだったようである。

手は、定期的に発行される切手、シリーズの切手を除くと種類存在する。このうち国内のインフラ整備に関するものとして「首都高速道路開通」、「東海新幹線開通」、「八郎潟干陸式」の記念切手がある。また戦後国際社会への復帰を果たし、存在感を増していく様子を見せるものとして、「太平洋橋脚ケーブル開通」、「国際通貨基金・国際復興開発銀行東京総会」、「第一八回オリンピック東京大会」の記念切手がある。その他に発行された記念切手は、今年の大河ドラマ軍師官兵衛にも関わり深い「船路城修理完成」である。

今回展示されていないが、昨年発行された記念切手は一九六四年とは大きく様相が異なる。「消防団二〇〇年」、「日本スイス国交樹立五〇周年」等組織設立や国交樹立から何周年を記念するものが大多数となっており、切手

からも社会が成熟していることが感じられる。このように、切手を見る際には、図柄の美しさだけではなく、発行された当時の世相を反映していることにも注目して頂きたい。

右端が1964年の東京オリンピックの競技日程表。切手は武道館・物沢体育館・代々木競技場・国立競技場・聖火台を図柄にしたもの。壁面には東海道新幹線の開業当時と現在の比較もある。



切手展示

## 昭和時代 深江の子供の遊び

深 江 塾

深江塾では昭和二十年代から三十年代半ば、深江の小学生を中心とした子供の遊びを聞き取りや記憶に基づいてまとめた。全国的に共通した部分もあるが、当時の遊びの深江独自のルール、遊ぶ場所、技術の再現や、盛衰の時期などに重点を置いた。

遊びの代表は男の子では「ラムネ」「ベッタン」「バイ」である。この三つの遊びは、昭和三十年代半ばを境にしてぶつ切りとその姿を消した。その理由の一つは、町から「路地」「原」がなくなったことである。二つ目は、テレビの普及、塾通い、お稽古ごとなど、子どもたちを取り巻く生活環境の変化である。遊びのそれぞれの名前、ルール、技術などもほとんどが忘れられてしまった。



写真1 鞠つき (昭和20年代末、桑原加代子さん提供)

### 1、深江の主な遊び

ラムネ

道具は清涼飲料水の「ラ

ムネ」のビンに入っているガラス球である。一般には「ビー玉」と呼ばれているが、深江でビー玉という子はいなかった。遊びには「さんかく(三角)」「カメ(亀)」「にぎりん(握り)」「ホール(穴)」があった。深江では特に「さんかく」を「ペーキン」「ホール」を「ポリ」といった。ラムネ遊びは「ダーリンしようか」との呼びかけで始まる。

「ペーキン」は地面に一辺三十センチくらいの三角を描いてその中にゲーム参加者が約束の個数を入れる。「さんかく」から約一・五センチ離れたところから参加者が順番に自分の玉でさんかくの中の玉を順番にはじき出す。ラムネはどの玉もグリーン一色であった。そのため自分の玉と区別するためにコンクリート壁で擦ってスリガラス状の白濁した玉にした。「カメ」は若干の傾斜をつけた地面に亀の甲羅を描き、溝と島の部分をつくる。親を選び、親は地面に描いた亀の甲羅の横に座り、甲羅の島にそれぞれ玉を置く。子は一歩ほど離れたところからその玉をめがけて放り投げる。島から外れた球は溝に落ちて傾斜の下の亀の頭部分に落ちて親の取り玉となる。このゲームでは親が参加者の玉を自分のものにするとき「はい、いらいはい」という声をかけて自分のものにする。「いらいはい」と「いらいはい、お客さん」という意味である。

「ポリ」は、地面に四ないし六個の直径・深さ五センチ程度の穴を掘り、参加者がその穴に順番に入れてゴールに帰る遊びである。穴から次の穴にビー玉を入れるためには、その穴に小指を必ず入れておくのがルールである。おおよそ昭和二十五年生まれ以降の子供が盛んに遊んでいた。「ポリ」が盛んになると「ペーキン」や「カメ」をする子どもはいなくなった。子どもたちは日が暮れると、路地に掘った穴をそのままにしておき、暗くなると大人がその穴に「まずき、特に雨が降るとそこに水が溜まり歩きにくい。近所のオジサンが「跡はちゃん」と埋めとけ」とよく怒っていた。

「にぎりん」は、たいていは「ベッタン（めんこ）」と併用して遊ぶ室内用のゲームであった。雨の日、外で遊べないとき漁師の漁具納屋に入り込み、ラムネを握ってその数をあてっこした。

#### ベッタン

遊びを紹介する本には「メンコ」と書いてある。遊び方には大別して単純な「かえし」とやや賭博性の強い「ニッチン」がある。

「かえし」は、当時比較的手に入りやすかった木で出来た「リング箱」を勝負台にした。家の縁側を利用することもあった。台も縁側も使えないときは路地の地面を利用した。表面の砂を取り除いてやや固めの地面に互いのベッタンを叩きつけて裏返しあうゲームである。地面が砂地や畑跡のような柔らかい場所ではこのゲームは出来なかつた。お寺、正寿寺の境内はよい場所であった。ただお寺からは歓迎されなかつたようである。

お寺が使えない場合は大日神社に神輿を置く「お旅所」を利用した。お旅所の基礎は「一辺がおよそ二尺七十寸、高さ約四十寸で縁を表が平らな御影石の角石がぐるりと取り巻いていた。その縁石はちょうどベッタンの勝負台にびつたりで、四つの辺があるか各辺で、いろんなグループが床木の代わりとして利用した（写真2）。

「ニッチン」は互いに一定枚数を出し合せて箱の上などに重ねて置き、その札を自分の札で叩き落とすものである。このとき落ちた札が一枚重ならつたら勝ちで自分のものになる。二枚ではなく三枚重ならつたり、重



写真2 大日神社境内にあったお旅所の基礎

ならなかつたりした時は負けで相手に取られる。「ニッチン」に使う専用の札にはロウや油を塗ることが多かった。これは札を滑りやすくするの目的である。漁師の家にある漁船燃料のドラム缶の上蓋に残っている油に浸し、黒くしたのもあった。

「ニッチン」は「かえし」に比べ一度の勝負で取り合いする枚数が多く、賭博性が強く高学年の子供がやっていた。昭和二十年代生まれの子どもがもつぱら遊び、昭和初期生まれや三十年代の生まれの子供は「ニッチン」はやらず、ベッタンといえはもつぱら「かえし」をさしたとい、時代によって流行の違いがあった。

ベッタンの表面には絵が書いてある。プロ野球では打撃の神様といわれた巨人の川上哲治、大阪（現阪神）タイガースの伝説の強打者、藤村富美男選手、大相撲では栃錦、若乃花、吉葉山、鏡里、朝潮、映画では「笛吹き童子」や「紅孔雀」の中村錦之助、東千代之介、あるいはゴジラなどが描かれていた。ベッタンは菓子箱に入れていたが、上手な子はミカン箱にギッシリ入れていた。

#### バイ

「バイ」はたいてい「ペーゴマ」と言われているが、深江では「ペーゴマ」と呼ぶ子はいなかつた。「バイ」は「ラムネ」や「ベッタン」と違って深江でも阪神電車以南で盛んだった。遊びの本で紹介されているゲームの土儀はゴザとなっているが、深江では漁師のゴム合羽のお古を利用した。

「バイ」は直径三寸ほどの円錐形の金属製のコマだが、心棒がない。「バイ」の底にコマのようにひもを巻いてコマを廻す要領で土儀に投げ入れるのだが、技術の第一関門は、このひもを巻くことである。コマよりも小さく、心棒がない「バイ」にコマよりも細いひもを巻くには相当な練習が必要で、土儀の上に投げ入れて廻すにも技術が必要だった

(写真3)。

勝負は、双方の「パイ」がぶつかりあい、飛び出したパイを手で受け、落とせば負け。回転する「パイ」がぶつかって飛び出す場所へすばやく動き、キャッチするため、ゲーム参加者はパイの動きに合わせて、箱の周りを、身をかがめて歩き回った。ゲームに参加していない者は飛んでくる「パイ」に当たらないように、また「パイ」をキャッチする動きに邪魔にならないように遠巻きに見学した。

自分のエースの「パイ」には砥石や近所のモルタルの塀で擦ってパイの底を磨いた。これはパイの重心を下げるためといわれたが真偽のほどは分からない。「パイ」をモルタルの塀に擦ると塀は落書きしたように黒い筋が付き、錆が浮いた。細工をした塀は、井戸の水で砂をつけたタワシで洗った。

「パイ」は危険なためか学校で完全に禁止されており、ラムネやペタタンと違って大人があまり来ない場所で行った。この遊びは、昭和二十五年生まれくらいの年代が昭和三十年代半ばまで行っていたが、それ以後の年代は買った人は極めて少ない。「ベタタン」や「ラムネ」は今日でも学校で「昔の遊び」として道具もあるが「パイ」はない。その意味でも「パイ」は少し特異な遊びである。

#### 風揚げ

風揚げは、冬休みからせいぜい一月いっばいの遊びで、深江の浜の子は、海岸の砂浜で風揚げをした。深江の海岸には昭和二十年代後半に高潮を防ぐ堤防が出来、冬場は堤防越しに北風が南の海に向かって勢いよく吹くため、堤防の外の浜辺で堤防を背にして風を揚げた。堤防は北風よ



写真3 ヒモを巻いた状態の「パイ」

けになったのでひなたぼっこしながら風揚げした。風は、紙と竹ヒコで出来ていて、やや大きく全体が緑色をした「奴だこ」と、小型で赤みがかった「金太郎」の絵柄の二種しかなかった。風の下部には新聞紙を幅五ないし十センチ程度の幅で切り、大抵は米粒をつぶした糊で貼って足(尻尾)とした。それが長いほど安定して高く上げることができた。糸は漁で使う網用の糸が調達されていた。

#### ドングリ

十月になると男の子は今の森北町や青屋の山の麓にドングリをとりに行った。ドングリには二種類の形があった。深江では本来の形のものには「エンパン」と呼び、長細いものを特に「ワッチュウ」、扁平な形のもは「エンパン(円盤)」と呼ぶこともあった。

それぞれのドングリは形によって軸の刺し方が違い、通常の形のドングリやエンパンは実の上から底に向けて軸をさすが、ワッチュウは実を横にして軸を刺した。これを「タイコ」と呼んだ。

ゲームはアルミ製の口が大きく広がった洗面器にビニールの風呂敷敷を張って、土俵とした。勝負は先に回転が止まって倒れた相手のドングリに自分のドングリを軸が乗れば勝ちである。

ドングリは、口の広いガラス瓶で水に漬けた。こうしないとドングリが乾いてひび割れた。かつて深江のタンジリのコマ(車輪)を祭りが終われば専用の井戸で水付けにしていたのと同じ理屈である。

#### 板飛行機

飛行機の形をした板にコマを付け、地面を走るだけで、手作りした。子供が座れるほどの長さ一尺の板に、前の翼として幅十センチ、長さ一尺、後にはその半分くらいの翼をつける。胴体部分の前後、翼の両端に鉄製の敷居コマを付ける。

この板に座って旧国道(新道)の少し傾斜のあるところでスノーボー

ドのようにして遊んだ。深江南町一丁四丁目付近の浜の方では堤防沿いの道路から北に向かう取り付け道路が坂になっていたので、そこも格好の飛行場であった。この遊びは飛行機づくりが面倒だが、遊びそのものは単純であった。昭和三十年代半ばにはずっかりなくなつた。舗装道路が車のものになつたせいであろう。

#### 模型飛行機

紙飛行機とは、ゴムの動力で飛ぶ模型飛行機である。竹ヒゴとごく細い角材とニーム管（アルミ製の細い管）、障子紙のような薄い紙などが入ったキットで、自分で作った。本庄小学校の近くの文房具店（金星堂と西向文房具店）で買った。近所の駄菓子屋でも手に入るが、大抵の子はこの模型はこれらの文具店で買った。

この模型飛行機で人気があったのは主翼の半ばを角度三十度くらいで上部に折った「スカイホース」と、その端が十度くらい角度で上がる主翼を持つ「エース」という二種類である。いずれのキットでも翼は竹ヒゴを細工する。火であぶったり熱湯を利用したりして翼の微妙なカーブをつくる。これに失敗すると翼にねじれや歪みが生じて上手く飛はない。翼には紙を張り、霧を吹きかける。火にあぶって乾かす。こうして翼はピンと張って翼らしくなる。

飛行機の滞空時間が大抵は二分に満たない。二分の滞空時間でもまっくいは高さ五メートルには上がる。それゆえどこでも飛ばせるわけではなく、当時の原っぱではあえて低空飛行させた。

筆者の記憶違いでなければ昭和三十年、本庄小学校で運動会の終わつたある秋の日、校庭で模型飛行機大会が開催され、三年生から六年生の男子児童が多く参加し、競技は飛行距離と滞空時間を先生が計測した。上位三位までの児童に大小の模型飛行機キットが賞品として渡された。この様子は本庄小学校の当時のアルバムに小さくその写真が残された

ている。

#### 探偵(っ)・西部劇(っ)

江戸川乱歩の「少年探偵団」が本や映画ではやっただろっか、子どもたちはそれぞれが少年探偵団の小林少年や団員、あるいは明智小五郎に扮して遊んだ。「探偵(っ)」は「鬼(っ)」の名前を変えただけの遊びで、「怪人二十面相」が鬼となった。ふつうは鬼になりたがらないが、「怪人二十面相」の鬼役になろうとする子はいた。

みんな駄菓子屋で売っているブリキ製の拳銃を持っていた。火薬は「百連発」という幅五ミリほどの巻紙に直径二ミリに足らない火薬の粒が貼り付けられていて、引き金を引けば火薬の帯が順に押し出されて「パンパン」と発射音がる。

拳銃でも「リボルバー」という回転式の六連発のものは高価だった。この連発拳銃は使用する火薬が強が大きかった。お年玉がもつた正月過ぎにはこの連発銃をもつた子が増えて、探偵(っ)は西部劇になり、参加者は役柄を変えた。探偵団がカウボーイになったり保安官になったりして撃ち合いや決闘をした。

遊び場は近所の路地が中心だったが、神楽町(今の深江南町一丁目)の松林や、芦屋の松浜公園まで出かけたこともあった。

雨の日には作業が休みのイリコの加工工場に入り込んで遊ぶこともあった。誰もいない工場には、イリコを干すための簾やトロ箱が積み上げられていた。簾は「隠れみのに」になり、箱は盾になった。

大人たちが来ないか、細心の注意をしていた。同じような遊びでも主人公が「月光仮面」になるのは昭和三十年代の後半以降であった。

#### チャンバラと刀つくり

チャンバラ用の刀はたいてい竹を利用したが、夾竹桃の枝を利用することもあった。夾竹桃は適度な反りがあったて木刀のような感じが出た。

公園に植えてある夾竹桃の直径一呎ほどの枝を切ってくるが、見つかるのと叱られる。夾竹桃の枝の根に近いところを握る部分としてそれ以外の刀身に当たる部分を小型の折りたたみナイフの「肥後守」でその皮をはいだ。皮をはいて、日置くと白くなっていかにも刀身らしくなる。ただナイフで夾竹桃の皮を割くときには、吐きそうなる木の匂いが刀づくりの作業は何度かその手を休める必要があった。夾竹桃の刀は乾くほど軽くなって、実際に体に当たっても竹のものより痛みを感じなかった。

#### ボンツとワンバンノーバン

「ボンツ」と「ワンバンノーバン」は、野球のルールを取り入れた簡易なボール遊びである。「ボンツ」はテニスボールを利用し手のひらでバット代わりにする。公式テニスボールよりもソフトテニスのボールが利用されることが多かった。地面がやや硬くボールがはずむ必要がある。神社や寺の境内あるいは広っぱがその遊び場で、男女が混じって遊ぶこともあった。

「ワンバンノーバン」は「ボンツ」より広い場所が必要で、男子のみの遊び。ソフトボールを使いバットで打つ。打ったボールをノーバウンドで受ければバッター交代。グローブを使わず、素手で受ける。ワッパウンド以上で受けた場合はアウトにならず、打者は続けて攻撃できる。浜の子は今の深江南町二丁目の太田造船の工場敷地になっている場所での遊びをしていた。酒造工場が昭和三十年代に出来てからはこの遊びをするこ



写真4 縄跳び（昭和20年代末、桑原加代子さん提供）

とはなくなった。

#### ゴムとび・なわとび

ゴム跳び、なわ跳びはもっぱら女の子の遊びである。女の子と男の子が一緒に遊ぶことは、絶対とわいていはいなかった。ただ長縄の縄跳びは、学校でのみ男女が混じって遊んだ。縄跳びは昭和三十年代までは藁製の縄や荷造り用の縄で遊んだ。今は学校内の遊びとして残っているが、かつては路地でも遊んだ（写真4）。ゴム跳びは、輪ゴムを結び二重にして腰の高さなどで飛んだ。

#### 2、深江の遊びの特徴

##### 多様な男児の遊び

深江ではここまで紹介した遊びが中心だったが、それ以外にも、男の子は釘刺し・釘倒し・ケリ馬（ケウマ）・ドウマ・ニクタン（宝取り）・相撲・ゴム鉄砲による箱倒し・秘密基地遊び・大名町人・三角ベイス・竹とんぼ・竹馬・紙芝居・酒瓶の王冠集めで遊んだ。

釘倒しは砂山に釘を刺し倒さないように砂を取り除くもので、畑の土を使っても遊んだ。釘刺しは、地面に投げて刺し、刺さっている相手の釘を倒して勝ち負けを決めたり、地面に刺さった場所を線をつなぎ相手を線の中に閉じ込めたりして遊び、後者は「囲み」と呼んだ。釘は、頭部分がし字になった船釘を、上組が建てた東神戸造船所や松井造船所に拾いに行った。ケリ馬は二人一組の馬役とその上に飛び乗ろうとする騎士役とに分かれ、目隠しされた馬の足役が、近づく騎士役の気配を察して蹴るもので、蹴られれば馬役の勝ちとなる。ドウマは股に頭を入れて列を作り、その上に飛び乗る遊び。ニクタンは二手に分かれて、地面にS字の線を引き陣地とし片足で倒し合い相手の陣地にある宝を取った方が勝ちになる。大名町人は、ドッジボールを使いワンバウンドで相手方

の領域に手で打ち返し合うゲームで、失敗すると身分が下がっていく遊びである。

昭和二十年代から三十年代の子供の遊びは、季節にかかわらず屋外で遊ぶのが基本で、学校から帰れば、塾や習い事もなく寝るまでが自由で遊ぶ時間だった。三人から十人以内で、深江南町（ハマ）と深江本町（オカ）の子どもたちは別々に遊び、「オカとハマ」で勝負することもあった。しかし遊びの内容には大きな変化はなく、流行も共通していた。それぞれのグループにガキ大將的なリーダーがいて、小学校六年生がなるのが一般的だった。

遊び道具の大半は自分で工夫したが、駄菓子屋や文房具店で模型飛行機などを購入することもあった。また下校時刻には校門前にゴザを敷いただけの出店ができ、針金細工で輪ゴムを飛ばす鉄砲などを販売したこともあった。下校中に買い物をするのは禁止だったので、店は神出鬼没で、教師に見つからないよう、営業していた。

女の子の遊びとして花いちもんめ・おはじき・おじゃみ・ままごと・あやとり・リリアン編み・人形づくり・お手玉・おはじき・目拾いやクローバー集め・シロツメタサでの首輪づくり・八十八夜や「おちゃらかはい」「せっせっせ」などの手遊びがあった。また網元など富裕な家の子供の誕生会や節句にお呼ばれた。着物を着て出かけ、もうせんの上一人ずつお膳を出してもらいちらしらずしなどをご馳走になった。

#### 遊び場

子供たちの主な遊び場は、深江浜、深江南町一丁目から深江本町一丁目付近の田んぼと林、家の近くの原っぱ、正寿寺や大日神社の境内、路地裏や廃屋跡・工場跡。現在、見附公園付近、漁具置き場に使われていた漁師の納屋、森北町付近の本庄山の山裾などだった。

深江浜は深江南町四丁目付近には砂防突堤があり、またゴロタ石やコ

ンクリート片が転がっていて、潮の干満によって海面上に浮上しウサギ釣りの場になり、タフノオトシゴも捕れた。二丁目付近は砂浜が広がり水練に使われ、地引き網漁が行われた。網を引くのに加勢し、サバやアジをもらえた。アジはその場でさばいて食べた。イワシは水揚げが多かったが見向きもなかった。

深江本町一丁目から三丁目までは、ほうとう池、さら池と呼ばれる池があり、フナやドジョウを釣って遊んだ。土手にはツクシ、スキナがよく生え、変電所辺りにはスカンボが生えた。漁具置き場の納屋は八畳から十畳ほどの広さの板敷きで、主に雨天に遊んだ。森北町の山裾は、クリ・ドングリ拾いや桶取りに利用した。

#### 春夏秋冬と遊び

遊びには季節によって変わるものと年中変わらないものがあった。季節によって変わるものを見ると、新年はお年玉で駄菓子屋などで探偵ごっこや西部劇に使うピストルも購入したり、遊び道具をまとめ買いもしたりした。春は正月にお年玉を使って購入したおもちゃで遊び、夏は小川やため池、海辺で船遊びやメダカなど魚や水生昆虫を採った。雑木林で木を切って刀づくりもした。秋には初秋は防波堤で釣りをしたり、晩秋には山裾でドングリなどを採集したりした。ラムネやペタタンは季節を通して遊んだ。

本文をまとめるに際しては、深江浜のメンバー以外に谷岡尚武、野田正雄、塩崎謙一、新田誠の各氏から様々な協力を頂いた。

本稿は深江浜で飯田一雄・三枝照枝・松下芳子・柳田陽子・増田行雄・津田雅敏・植田延生・森口健一・大園正美が記憶や聞き取りをもとに意見交換、1は森口が、2は大園が文章化した。

## 深江物語 (4)

昭和20、30年代の深江浜を歩く(2)

深江巻 森口健一

### 養豚場

昭和二十五年(一九五〇)九月三日のジェーン台風で大きな被害を受けた深江では、防潮堤計画が前倒しされ昭和二十七年に計画図が作られています(前号参照)。その防潮堤を高潮の圧力から支えるように、堤防の北側に土盛りをして幅四尺のコンクリート舗装の道が付けられました。道は堤防に沿って高橋川河口の東側から芦屋川の西岸まで延びています(写真1)。

高橋川河口の東海岸を基点に東に向かって歩きます。右手は海岸、左手が深江の集落で、南地区の一番西は磯島町(深江南町四丁目)になります。まず左手、いまの深江大橋北詰付近に敷地がおよそ三〇〇坪ばかりの養豚場(写真1の①、以下①と表記)がありました。建物はトタン葺きで簡単な柱に板囲いのものです。その建物の中央に通路があり、両側に木の柵を設けておおよそ三〇頭ばかりのブタが飼われていたのです。昭和二十年代後半からごくわずかの期間で三十年代に入るといつの間にかなくなりました。

養豚場では男性の管理人が一人でブタの面倒を見ていました。ブタはお腹がすけばブービーと結構うるさいそうで、管理人が棒でブタを叩きます。ブタは怒り、嫌がり暴れ、ついには何頭かが木の柵を越えて逃げ出すことがあります。近所に松葉氏の広い邸宅②がありました。

た。松葉邸は南の道路に面して格子の木戸や低木の垣根があるばかりで、扉がありませんでした。逃げだしたブタはこの垣根を飛び越えて敷地に入り込んで、そこを走り回ることが再々ありました。

養豚場は深江ショッピングセンターの開発を手がけた難波氏が経営者だったそうで、地域の人は「なんばのブタ小屋」と呼んでいます。経営者御本人かどうか定かではないのですが、時折管理状況を馬に乗って視察にこられることがありました。その光景は近所の子どもたちには非常にめずらしい印象を残しました。

### 川西航空機の寮と医院

養豚場に接して東側に川西航空機の寮③がありました。戦後、川西航空機は新明和工業となりましたが、当時は旧社名でその寮を呼んでいたのです。

この建物は海岸から広がる砂地の中に立っていました。建築当時は



写真1 昭和29年ごろの深江浜上空(清家直衛氏提供)

防潮堤もなく、そのため建物は、東南アジアでよく見られるような高床式の建物でした。砂浜がらざつと一層ほど高い床がいくつもの柱で支えられ、東西に長く西端で南に棟が伸びたエル字型の木造でした。

この寮が地域の人に親しまれたのはその西端の棟に「入江先生」と呼ばれる名物医を開業診察されていたからです。深江には幾つかの病院がありましたが、この先生はざつくばらんで気取りがなく、地元の人で「どないしたんや？」なに、お腹が痛い？」「どれ、ああ、こんなもんちよつと薬飲んで一日寝と、たらなおる」「明日はガッコ休んだらアカンで」「お母さんな、あんまり固いものはいかんで。お粥さんでもしたり。心配ないから」と言うような調子でした。

診察室は、東西に長い建物の東よりの玄関から廊下を西に向かい、南に折れた突き当たりがありました。寮の各部屋からやや独立した部屋になっていました。部屋の南東西に窓があり、特に南には大きな窓が海の方に向かっていて大変明るい診察室でした。北の壁に沿っていろいろな医療器具や、薬品を入れた緑や茶色の小さなガラス瓶が並んでいました。

この建物は現在鉄筋コンクリート三階建ての市営住宅になっていますが、かつての寮の建物の南に広がっていた砂浜は「磯島公園」として整備され現在に至っています。

#### 釣り具店や洋館

磯島町（深江南町四丁目）が海岸に面する東西の中ほどに平屋の河崎釣り具店④がありました。堤防が出来るまではこの店は、南に広がる砂浜から波打ち際につながっていて、釣り船や貸しボートも用意されていました。昭和二十五年のジェーン台風の時には高潮でこの店舗

ごと流出、釣り船やボートは阪神電車の線路沿いまで流されました。釣り餌のゴカイは寿司桶のような木の桶に入れられ、買うときは猪口で量ってもらいました。この店はゴカイ販売が主で、釣り道具はあまり置いておらず、子どもたちは「餌屋」と呼んでいました。

釣り具店を過ぎると、堤防沿いの道路に接するように逸見邸の洋館があります（写真2、⑤）。モルタルの壁、色つきカラワで傾斜のある屋根を持つこの屋敷は、絵本の中にあるような風情がありました。

磯島町は深江の町でも一番低いところで、この洋館の二階部分がちょうど堤防沿いの道路面の高さくらいになります。逸見邸の玄関があった付近には、堤防沿いの道路から現在でも北に向かってコンクリートの階段を下りなければなりません。洋館があった場所は大部分が「ウエタ商事」の工場とその駐車場となっています。



写真2 逸見邸（大西令子氏提供）

洋館は、この逸見邸のほかにも釣り具店の少し北にも一軒⑥ありましたが、「ナニワカメラ」という会社の社宅だったというのですが、椰子の木をはじめ大小の木がたくさありました。昭和二十年代の終わりころには、人が住んでいるような気配はなく、逸見邸は屋敷全体が日に当たって明るい感じだったのに対し、こちらの屋敷は木に囲まれてやや暗い感じで、子どもたちは「お化け屋敷」と言っていました。

逸見邸からさらに東へ行けば、

堤防沿いの道と北から札幌通りが海岸に突き当たる三叉路になります。この三叉路の北には、札幌通りの西側に南から釣り具店・「丑松」の網元・晶酒店、さらにその北には山八青酒店が並んでいます。釣り具店では、西にある河崎釣り具店よりも新しく、昭和三十年ころに開店しました。餌だけでなく新しい釣り具が並んでいました。竿と言えば竹の一本竿だったので、ここには丈夫な「つなぎ竿」が置いてありました。竿にリールを付けて遠くまで投げることで、この夢のような高価な道具で、子どもにはただ見るだけのものでした。この店は夫婦だけで営業し、当時としてはハイカラで、朝に餌を買いに行けばシューインドリーの後のテーブルで、トーストとコーヒートの朝食をとっていました。パンの焼ける匂いやコーヒートの香りがめずらしく店そのものが高級店に感じました。

釣り具店の北に並んで「丑松」の網元の屋敷⑧があります。元々和歌山から深江にこられたと身内の方から聞きました。その名は山本丑松です。

この網元の門を東に出て南は、札幌通りが海岸に突き当たり堤防の開口部から海岸に出られます。この海辺から東に向って幅およそ五〇呎ほどの浜辺を人々は「丑松の浜」と呼んでいました。丑松の浜は、オカのほうから流れてくる川がないため特に水のきれいなところでした。堤防が出来るまでは奥行きのある砂浜で、夏には松蔭女学校がここで水練学校を開き、昭和二十一年までは本庄小学校も毎年七月二十日から一〇日間ほど水練学校を開いていました（写真③）。設置してしまし飛び込み台を持ち込んで、岸から一〇呎ほどの沖合に設置してしました。

丑松の浜から西を振り返ると堤防が海岸のすぐそばまであって、砂

浜はほとんどありません。堤防から海に向って沖まで大小の石が転がっていて、干潮時にはその一部があちこちに顔を出しています。海底も多くのゴロタ石があります。そのため小魚の格好の棲家となるでしょう。カレイ、ハゼ、テンコチ以外にアブラマ（アイナメ）やサンパソウ（石鯛の幼魚）のような磯魚の釣り場でもありました。また岩の間では、食用になるカニも小さなものが取れたものです。

#### 浜戎神社

札幌通りが海岸に突き当たる三叉路から東に行けば、見附町（深江南町三丁目）になります。堤防沿いの道の北側、札幌通りの横に浜戎神社⑨があります。札幌通りががかつての深江の南北のメインストリートで、それが海に突き当たる場所に、社殿は海に向かって建てられています。いづろ出来たのか不明ですが、漁師たちが深く信仰してきました。拝殿正面の扉の上、欄間には恵比寿様が来依に座って大き



写真3 本庄小学校の水練の様子（昭和10年）



写真4 室戸台風で折れた鳥居(右端、昭和9年9月)

な鯛を抱き、釣り竿を持った彫刻が飾られています。社から南東に波打ち際にむかって一〇ほど離れたところ、石造りの鳥居が立っています。堤防側から見ると、砂浜の中に鳥居が立ち、その向こうに社殿がある位置関係になります。

敷地には社を囲むよう数本の松の木がありました。防潮堤が出来るまでは、波がこの鳥居の足元を洗い、昭和九年の室戸台風では鳥居が折れ、砂浜にころとして立っている写真が残っています(写真4)。

毎年九月十日にはこの浜戎神社を中心にして浜祭りが行われました。かつて芦屋・打出地区と深江との間で漁業区域に関する争いが度々あり、最終的に裁判で深江が勝った日を記念して浜祭りの日としたと伝えられています。浜祭りの日には社から北に向かって札幌通りに役店が並びましたが、昭和二十年代後半でも数軒の役店が出ていました。

また現在では、大日神社の例大祭の最後の日に神輿が森の稲荷神社のお社の周りを、周囲するのが慣わしになっていますが、昭和二十年代後半までは、森の稲荷神社から大日神

社のお旅所を経て、この浜戎神社まで神輿がやってきました。そしてこの神社の周りを神輿が威勢よく回ったものです(写真5)。当時、神輿を担ぐ若仲(若者のこと)には漁業関係者が多くいました。卯

の花祭りは夏の豊漁を願う意味もあり、若仲は世話人の止めるのも(形だけの制止ですが)聞かず、神輿を海に担ぎこみました。神輿が塩水を被ると錆を取る後始末にすいぶんと費用がかかったそうです。

この浜戎神社は、昭和四十七年に漁業組合が解散したことによって世話に困るようになり、社殿は平成五年(一九九三)大日神社にへ寄祀され翌年社殿は撤去されました。間間の一部は大日神社に保存されています。今では神社のあったところとして、鳥居の柱の一部と由来を記した銘板があるだけです。

#### 司馬遼太郎が描いた深江

江戸時代後期、日露の衝突を防いだ兵庫津の商人、高田屋嘉兵衛を描いた司馬遼太郎の小説「葉の花の沖」の「兵庫」の章に深江の浜が出てきます。江戸時代、一七〇〇年代の終わりころ、高田屋嘉兵衛が



写真5 浜戎神社を回る神輿(戦前、藤本吉江氏収集)

西宮方面から芦屋を抜けて深江にやってくる場面です。

西宮、芦屋をすぎた深江の浦と言う浜まで来たとき、嘉兵衛は渚まで出て海を見た。浜にいた老漁師に、「この浦の沖には兵庫から続いている洲が潮に隠れていると聞きましたが、どの辺りでしょう」嘉兵衛はきいた。「あのあたりよ」老漁夫は無造作におしえてくれた。略々洲は兵庫から伸びて深江の浦あたりまできていると嘉兵衛はかつてきた。

高田屋嘉兵衛が、西宮、芦屋方面から深江に来るとすればその道は西国浜街道である事は容易に想像できます。旅の人が東から来て深江に到り、浜へ出るとすれば札場通りを左に折れて南に行くのも当然でしょう。海に至ったところに浜戎神社があり、そこにいる漁師に前の深江の事を聞くのもまた自然なことです。

深江の土地は、東西に山脈のように土地の高いところと低いところが交互に横たわっているといえます。深江の海岸の一部には内部の土地よりも高い地域があります。高いところは海岸低地に挟まれた砂州の跡らしい。「葉の花の沖」は小説ですが深江の土地柄を思えば全くの作り話とは思えません。

#### 魚市場

浜戎神社の東側には昭和二十六年、「魚市場」ができました（写真6、⑩）。それ以前はこの位置から東北に平屋建てでトタン葺きの市場がありました。

建てかえられた魚市場は、木造一階建ての立派なもので、完成したお披露目には、大阪方面から芸人を呼んで野外演芸会が行われました。魚市場の南から東にかけて広がる砂浜にゴザを一面に敷いて棧敷とし、座る場所のない人は堤防の上に腰掛けて観覧しました。お笑いや手品

があり、子ども達も大喜びです。このイベントには盛大な「餅撒き」もありました。

市場の一階床はコンクリート打ち放しで、中央に一間四方くらいのセリ台があり、東に帳場が設けられてありました。セリが終わると市場の会計責任者の志井寅之助さん：地元の人「シイトラ」と呼んでいました。二階は大きな和室で主に漁師仲間の「寄り合い」という会議に使われていました。

この市場でのセリは飯田米

#### 見附町・松井の船大工場

飯田の魚市場から東には、三号加工場と呼ばれたイリコの加工場⑪がありました。前の浜で行われる地引網で取れた鰯を加工して「イリコ」にする工場です。加工場は、東町（深江南町二丁目）に、東から西に向って順に第一、第二加工場があって見附町にあるのが第三加工場というわけです。

第三加工場に隣接して東に「松井の船大工さん」とよばれた漁船を作る工場⑫があります（写真7）。



写真6 飯田の魚市場（左側）と神戸市魚類人工乾燥試験所（昭和39年ごろ、西本小太郎氏撮影）



写真7 第三加工工場（左側）と松井造船所（喜多一晴氏撮影、昭和32年ごろ）

この工場は、東西南北それぞれ二〇呎四方くらいの広さの空間を持った平屋の工場です。昭和二十年代の終わりごろ、筆者が工場を見学したときは老境に近い松井さんが、一人で全長が五呎ほどの木造船の漁船を作っていました。打瀬船ではなく、アサリ船を造っていたのだと思います。エンジンを載せるスペースのない小型船でした。工場の中は木の匂いに満ちていたように記憶しています。子供の背丈ほどの柄の先に、幅が大人の手のひらより少し狭い刃が付いた手斧で、太い木を打ち込むようにして削っていました。作業をしていく横には半分くらい完成した舟がありました。ふだん海岸で見る船と違って底板も横板も真の白な木の舟でした。

この工場は、昭和三十一年代半ばには閉鎖されました。後継者がいないことや前の海で小型の船を使っていたアサリ漁などができなくなったことが理由ではないかと推

元の人はいいます。

#### 海浜別荘・佐久間邸

見附町と東町（深江南町二丁目）の境の道の東町側に堤防沿いの道に隣接して「佐久間さんの別荘」と近所の人が呼んだ屋敷跡がありました。

東町のこの付近の土地は、西の磯島、見附町から比べれば海岸沿いでは一番標高の高い土地になっています。磯島の邊見邸が堤防から見れば二階がちょうど堤防沿いの道路面の高さくらいですが、この佐久間邸はほぼ道路のレベルの地盤になっていました。

敷地は正方形で約三〇〇坪。その敷地を赤レンガ積みの上に粗砂のモルタル仕上げの高さ二呎ばかりの塀が取巻いています。門は西向きで見附町に面しています。御影石つくりの三段ばかりの階段を上ったところに、黒い瓦の乗った屋根付の格子戸がありました。その門をくぐれば引き戸の玄関があります。

敷地の中には全体から見ればかなり北に寄せて、ほぼ総二階建ての木造二階建てが二棟ありました。二棟は西棟が普段の生活用の建物として使用されていたようです。この西棟に並行して東にやはり総二階の建物がありました。この二つの建物には一間（二・五呎）ほど間隔があり、これらの建物は一階、二階とも波打廊下で繋がっていました。これらの建物の特徴は、南、海に面して全面開口部となっていて特に二階からは大阪湾が一望できるものでした。

敷地には、多くの松が植えられました。敷地の周りを取り囲む塀の南には、幅一呎ばかりの木戸が設けられています。敷地からこの木戸を抜ければ、そのまま砂浜、波打ち際に行くことができます。もちろん堤防が出来てからは、木戸を開くことはなくなりました。敷地を取り巻

くセルタルの扉は、その先およそ五〇話ばかりにある波打ち際からの荒波や、台風時の高潮からも守られたことでしょう。

当時の近隣の家で二階建てはめずらしく、扉に開かれた敷地などほとんどありません。そのため御用聞きの人以外に扉の中を見る事はほとんどなかったのです。門をくぐって敷地の中にと近隣の人の生活音よりも、屋敷を取り巻く松の林を抜ける風の音のほうがよく聞こえるくらいでした。

大正時代から深江の浜に多くあった海浜別荘の一つだったのでしょう。昭和二十年代後半には海岸沿いにはいくつかの洋館もありましたが佐久間邸のような和風の別荘はこだけでした。

この屋敷の佐久間さんは、航空学校で戦時中に事故か戦闘か不明ですが、目に傷を負われました。そのためいつも濃い目の緑色の眼鏡をかけておられました(このことについては佐久間さんの従兄で、鎌倉市にお住まいの宇佐美雄さんに聞き取りました。娘さんが宇佐美悦子さんといふ筆者と同級生でした。この佐久間邸は昭和三十年代になってまもなく、ある宗教科団体の所有を経て昭和五十七年に分譲マンションが建設されました。

地元で聞き取り取材にご協力いただいた方は、松葉刀 野田正雄、谷岡尚武の各氏です。

本稿は、深江築で森口が聞き取りをもとに報告、飯田一夫・松下芳子・三枝照於・津田雅敏・増田行雄・植田延生のメンバーと内容を確認し、成文化したものを、大園正美が修正したものである。

## 史料館におけるIT施策

Webサイトアクセス状況

史料館研究員 高田 祐一

史料館では、情報発信のツールとしてWebサイトとブログを運営している。Webサイトとブログへのアクセス状況を報告する。

二〇一四年二月四日時点でWebサイトへの訪問数(ユーザーが開始したユニークセッションの数)が、サイト運営開始時からの累積が一万三二四訪問であった。昨年(二〇一三年三月一日からの差分が二八七九訪問で一日あたりが八・五アクセスで前年比では六%増となった。ブログはサイト運営開始時からの累積訪問数が二万五九五〇訪問であった。昨年(二〇一三年三月一日からの差分が七六・一六訪問で一日あたりが二・四アクセスで前年比では二%減となった。

Webサイトでは一日あたりの訪問数が微増しているものの大きな増加はみられない。基本的にWebサイトのコンテンツは前年から増えていないため、前年と同水準になったと考えられる。ブログでは前年比で二%減と大きく減少している。一昨年度から始めた過去の史料館だよりを紹介する「プレイバック史料館だより」の更新ペースが純化したため、新たなアクセスを呼び込まなかった可能性がある。

昨年より「史料館だより」のダウンロード数を号毎に集計しており、ダウンロード数が累計四九一件となった。「史料館だより」をいつでもどこでも閲覧できる環境提供に寄与しているといえよう。

二〇一四年度も時代に合わせた情報発信を考え、継続的な改善に取り組むたい。

## 史料館拡張30周年と 杉浦昭典名誉館長の瑞宝中綬章受章祝賀会

史料館副館長 道谷 卓

神戸深江生活文化史料館は、一九八一年（昭和五十六）二月十一日に、「神戸・深江会館生活文化史料館」としてスタート、二年後の一九八三年（昭和五十八）十月三十日、施設を拡張してオープンし、名称も現在の「神戸深江生活文化史料館」と改称した。この拡張・改名から二〇一三年（平成二十五）で、ちょうど三十年の節目を迎えるため、同年十二月二十二日、深江会館二階で祝賀会が開かれた。またこの日、秋の叙勲で瑞宝中綬章を受章された、史料館第二代館長で名誉館長の杉浦昭典・神戸商船大学名誉教授の受章祝賀会もあわせて行った。

もとの史料室が開設二年あまりで、拡張したのは、収蔵資料の急激な増加や、小学校の団体見学などによる来館者の増加によるものである。この拡張で、史料館は、鉄筋コンクリート二階建てのもとの史料室の建物を逆L字形に増設、結果、漣の酒蔵イメージした三階建ての現在の建物へと生まれ変わった。さて、祝賀会当日は、史料館に関する深い方や杉浦先生



杉浦名誉館長



林祐司海事科学部長（右）と杉浦名誉館長

にゆかりのある方など五十名を超す出席者が集まって、拡張三十年と受章を祝った。会は、午後一時、道谷卓副館長の司会によりスタート、最初に大國正美館長が開会のあいさつとして、拡張三十年の経緯と杉浦先生へのお祝いの言葉を述べ、設置者を代表し深江財産区の岡田逸至会長があいさつした。続いて、来賓として神戸市東灘区の石神晋一副区長がお祝いの言葉を述べられた。

次に、杉浦名誉館長の受章をお祝いするセレモニーへと移り、はじめに、元財産区管理会長・太田垣正雄氏のご子息である太田垣尚士氏からお祝いを杉浦先生に贈呈し、次に、先生の教え子でもある神戸大学海事科学部長の林祐司教授が祝辞を述べた。最後に、杉浦先生が出席したみなさんへ謝辞を述べられた。なお、会場には先生が受章された勲章と賞状が飾られ、多くの出席者が普段は見ることのないこれらを間近に眺めていた。

深江連合自治会の廣瀬隆作会長の音頭で乾杯、しばし歓談となり、会場は和やかな雰囲気につつまれた。歓談の途中、アトラクションとして大日靈女神社奉賛会による「深江だんじりばやし」が披露され、会場は大鼓と鐘の音が鳴り響き、だんじりのまつりが再現されたようであった。その後、歓談中には、震災の影響で解散した史料館の後援組織・友の会の小嶋悦庵会長と会員番号一番の手島司氏、友の会幹事の寺岡一夫氏の三人に登壇いただき、友の会の感想をお話しいただいた。また、今の史料館活動を支えてくれている地元の深江塾メンバーや小学校団体見学のボランティアアスタッフにも今後の抱負を語っていた。

宴もたけなわ、終了予定時刻が近づき、最後に道谷副館長が終わりの言葉を述べ、無事、祝賀会は終了した。



友の会の小嶋元会長（右）と寺岡さん、手島さん（手前）



史料館活動を支える地元の方々

## トライやるウィークと史料館

— 本庄中学校の生徒を受け入れて —

史料館研究員 水口千里

二〇一三年のトライやるウィークでは六月九日、十日の二日間、本庄中学校の二年生を受け入れた。今回は、曾根田青輝さんと桑島晃輝さんの二人が参加した。曾根田さんは、卓球部に所属し、将来の夢は、世界旅行とゲーム会社を設立することで、今は、ゲームや、小説や漫画を読むのが趣味だそう。桑島さんも同じく卓球部所属で、後輩に基本を教える良き先輩として、練習や試合に挑んでいる。特技は、幼稚園の頃から習っている空手である。二人とも初日に、博物館施設の仕草の内容をよく理解して取り組みたいと意欲的な抱負を語ってくれた。



曾根田青輝さん



桑島晃輝さん

一日午前中は、史料館内の展示資料をみて、資料の種類や使用方法を理解してもらった。またDVDを用いて民俗資料の整理の基礎について学習してもらった。午後からは、展示の体験をしようことになった。史料館には、季節の展示コーナーがあるので、それまで展示してあった五月人形の



季節展示の模様替え

後、手回しのカキ水機、水囊、虫取り籠、夏用敷簾など収蔵資料から好きなものを選んで、自由な発想で展示し、二人の「夏の風物詩」を作った。

二日目は前日の感想を話し合った後、考古資料の土器洗いと拓本の作成をもらった。

本庄中学校では、今年度、トライやる・ウィークの体験作文集を文庫サイズで刊行した(文集「トライやる・ウィーク二〇一三」神戸市立本庄中学校発行)。生徒の体験が非常にわかりやすくまとめられており、編集を担当された先生方のご苦労がしのばれる内容だ。その中から、二日間の体験を終えた、二人の感想文の一部をここで紹介したい。

片付けから始めた。史料館の五月人形はかきり老朽化しているので二人ともかなり気を使って細心に取り扱ってくれた。季節展示のテーマは「夏の風物詩」である。ここ

は、二人に完全に任せて、話し合ってもらった

桑島さん「夏の風物詩というテーマに合わせて、展示する仕事や土器洗いや、展示された展示物を片付ける仕事をしました。(中略)本物の土器をトライやる・ウィークで触れさせてもらったので楽しかったです。」

曾根田さん「展示というのは、僕はやったことがなかったので、すごく新鮮な気持ちで取り組みました。その後にした土器洗いや拓本も同じ気持ちで取り組みました。新鮮な気持ちでやると、どんな仕事でも楽しんでできるんだと思います。」



土器洗いが楽しかった

二人とも、学校生活では学ぶことのできないことを、トライやる・ウィークでは味わえるという実感があったように、担当した我々研究員も嬉しい限りである。二人のこれからの活躍を館員一同願っている。

## 史料館日誌抄

史料館副館長 道谷 卓

二〇一三年四月～一四年三月

△二〇一三年▽

5月18日 神戸婦人大学荒岡グループ

(見学者 一〇名)

6月6日 トライク・ウィーク・本庄中学校二年生(名を受け入れ

7月 7日 二日間史料館業務の休職

7月12日 東灘区役所職員研修

(見学者 二二名)

10月14日 甲南大学文学部

(見学者 四名)

10月17日 西灘小学校 三年生

(見学者 八六名)

10月19日 六甲小学校 三年生

(見学者 六〇名)

10月18日 てくてく東灘(東灘区役所主催)

(見学者 四〇名)

10月31日 本山第二小学校 三年生

(見学者 九二名)

11月21日 八多小学校 三年生

(見学者 二四名)

11月28日 大手前大学

(見学者 二四名)

12月22日 神戸深江生活文化史料館拡張30周年

(見学者 二四名)

杉浦昭典名誉館長瑞宝中校章受章祝賀会

(参加者 五三名)

△二〇一四年▽

1月16日 本山第一小学校 三年生

(見学者 三三名)

1月20日 六甲アイランド小学校 三年生

(見学者 六九名)

1月21日 福池小学校 三年生

(見学者 一三三名)

1月23日 本山第三小学校 三年生

(見学者 二二名)

1月27日 御影小学校 三年生

(見学者 一五五名)

1月28日 灘小学校 三年生

(見学者 五二名)

1月30日 中央小学校 三年生

(見学者 九五名)

1月31日 榊田小学校 三年生

(見学者 八二名)

2月4日 東灘小学校 三年生

(見学者 一八五名)

2月6日 本山南小学校 三年生

(見学者 八九名)

2月10日 向洋小学校 三年生

(見学者 八三名)

2月14日 福住小学校 三年生

(見学者 八三名)

2月17日 摩耶小学校 三年生

(見学者 五七名)

2月18日 本庄小学校 三年生

(見学者 七五名)

2月25日 本庄小学校 三年生

(見学者 三七名)

3月5日 高羽六甲アイランド小学校 三年生

(見学者 九名)

## 資料寄贈者「芳名

(敬称略・二〇一三年四月～一四年三月)

生島早緒理・岡田堯至・岡本朋子・北道啓子・高井昭十三・但馬孝太郎・辻淳喜・筒井基一・戸田紀久子・樋口慶子・浜本英夫・福田薫子・山口咲子 (藤川祐作記)

## 編集後記

戦前の深江の貴重な写真を寄贈いただき、今回関連調査ができた酒蔵の報告をしました。古い写真があればぜひ提供いただきたいと思います。また昭和の忘れられた深江浜の景観の聞き取りや子ども達の遊びを調査しました。ご協力に感謝申し上げます。

『生活文化史』 第42号 2014・3・31

編集/大國正美  
発行/神戸深江生活文化史料館

〒658-0021 神戸市東灘区深江本町3-15-17

☎ 078-45314980 (FAX兼用)

http://homepage2.nifty.com/fukae-museum/